

5月予報（全19枚）

病防第10号

令和7年（2025年）4月25日

各関係機関長 様

熊本県病虫害防除所長

病虫害発生予察情報について（送付）

令和7年度（2025年度）発生予報第2号を下記のとおり発表しましたので送付します。

令和7年度（2025年度）病虫害発生予報第2号（5月予報）

I 気象予報：令和7年（2025年）4月24日福岡管区気象台発表

◎向こう1ヶ月の気象予報（単位：％）

予報対象地域	要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
九州北部全域 (含、山口県)	気温	20	30	50
	降水量	40	40	20
	日照時間	20	40	40

II 【今後、注意すべき病虫害】

1 発生の概要

作物	病虫害名	発生予想		予想の根拠			備考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
早期水稻	葉いもち	並	並	並(±)	並(±)	降水並～少 (-)	
	イネミズ ゾウムシ	並	並	並(±)	並(±)	気温高(+)	
麦	赤かび病	やや多	やや少	—	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (-)	多発条件 出現日 (+)
イグサ	イグサ シンムシガ	並	並	—	並(±)	気温高(+)	越冬調査 やや多(+) 八代予察灯 平年比 やや少(-)
茶	カンザワハダ ニ	やや少	並	やや少(-)	並～少 (±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	茶業研究所 平年比 少(-)

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
茶	クワシロカイ ガラムシ	やや少	やや少	少(－)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	
	チャノコカク モンハマキ	やや少	並	やや少(－)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	フェロモントラップ 合志市 少(－) 御船町 少(－)
	チャハマキ	やや少	やや少	やや少(－)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	フェロモントラップ 合志市 やや少(－) 御船町 やや少(－)
	チャノホソガ	やや少	やや少	やや少(－)	並(±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	フェロモントラップ 合志市 少(－) 御船町 やや少(－)
カンキツ	灰色かび病	やや少	やや少	－	－	降水並～少 (－)	
	ミカンハダニ	並	やや多	やや少(－)	並～やや少 (±)	気温高(+) 降水並～少 (+)	果樹研究所 平年比 多(+)
ナシ	黒星病	やや少	並	並(±)	並～やや少 (－)	気温高(－) 降水並～少 (－)	
冬春 トマト	黄化葉巻病	多	やや多	黄化葉巻病 多(+) コナジラミ やや少(－)	やや多～並 (+)	(コナジラ ミ) 気温高(+)	
冬春ナス	すすかび病	やや少	やや少	やや少(－)	並(±)	降水並～少 (－)	
冬春 キュウリ	うどんこ病	並	少	並(±)	並(±)	降水並～少 (－)	
	べと病	並	少	並(±)	並(±)	降水並～少 (－)	



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

作物	病害虫名	発生予想		予 想 の 根 拠			備 考
		平年比	前年比	巡回調査	防除員報告	気象要因	
ウリ科 野菜	退緑黄化病 ※スイカ 退緑えそ病	並	やや多	退緑黄化病 並(±) コナジラミ 並(±)	キュウリ, メロン, スイカ 並 (±)	(コナジラ ミ) 気温高(+)	
イチゴ (親株)	ハダニ類	やや少	やや少	少(－)	やや多～並 (±)	気温高(+)	
冬春 果菜類	灰色かび病	やや少	やや少	イチゴ 並 トマト, キュウリ やや少 ナス 少 (－)	キュウリ 並 トマト, ナス , イチゴ 並～やや少 (±)	降水並～少 (－)	

※予想の根拠末尾の括弧書きは、(＋)は発生を助長する要因、(－)は発生を抑制する要因、(±)は影響が少ない要因であることを示す。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

2 予想発生量、根拠、対策等

◎早期水稻

1) 葉いもち

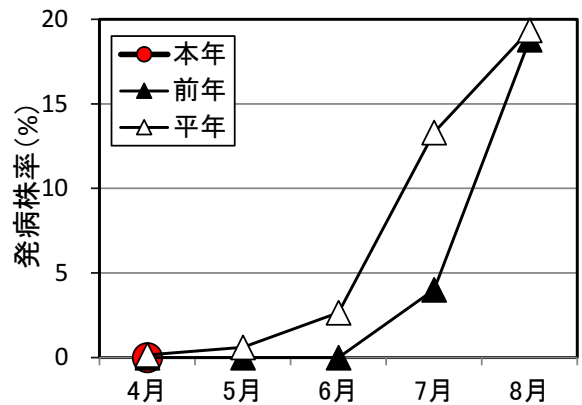
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病株は確認されず（発病株率平年0.2%）、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 補植用苗は伝染源となるため、早めに処分する。



早期・早植え水稻葉いもち発病株率の推移
(5月以降は早植え水稻を含む)

2) イネミズゾウムシ

(1) 発生量：並

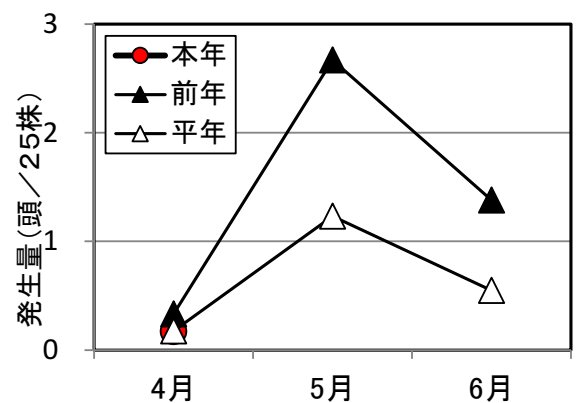
(2) 根拠

ア 4月の巡回調査で被害は確認されなかったが、成虫は0.2頭/25株（平年0.2頭/25株）確認され、平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 成虫が10株当たり5頭以上発生した場合、水面施用剤により防除する。

イ 根の発育が不良な水田では幼虫の被害が大きくなるため、ほ場を観察し発生に注意する。



早期・早植え水稻におけるイネミズゾウムシの発生推移

◎麦類

1) 赤かび病

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 小麦の開花期（合志市）以降に観測された赤かび病多発条件出現日は5日と過去5年間の平年（1.0日）より多い（+）。

イ 二条大麦の蒴殻抽出期（合志市）以降に観測された赤かび病多発条件出現日は6日と過去5年間の平年（1.6日）より多い（+）。

ウ 4月24日福岡管区気象台発表の九州北部1ヶ月予報では、向こう1ヶ月の気温は平年比高（+）、降水量は平年比並～少（-）の予想である。

(3) 対策

ア 収穫が遅れると、赤かび病菌が産生するかび毒（DON）の含有濃度が高くなる傾向があるため、適期に収穫する。

イ 収穫後、適切な水分まで乾燥する間に、赤かび病菌が増殖すると、かび毒（DON）が産生されるため、収穫した麦は可能な限り速やかに乾燥をする。



表 小麦の開花期以降の赤かび病多発条件出現日（熊本市：アメダス実測値）

	2025年 (R7)	2024年 (R6) 多発年	2023年 (R5)	2022年 (R4) 多発年	2021年 (R3)	2020年 (R2)	1998年 (H10) 多発年
開花期から10日間の多発条件出現日数	5	2	0	3	0	0	5
発病穂率（%） 5月上中旬調査	未実施	24.1	1.8	3.3	0.1	1.0	76.1

表 二条大麦の蒴殻抽出期以降の赤かび病多発条件出現日（熊本市：アメダス実測値）

	2025年 (R7)	2024年 (R6) 多発年	2023年 (R5)	2022年 (R4) 多発年	2021年 (R3)	2020年 (R2)
蒴殻抽出期から17日間の多発条件出現日数	6	3	0	5	0	0
発病穂率（%） 5月上中旬調査	未実施	1.8	1.0	2.0	0.0	0.5

※アメダス実測値を用いた赤かび病多発条件出現日の判定結果は病虫害防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）に掲載しています。

◎イグサ

1) イグサシンムシガ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 3月24日に実施した越冬世代の調査では、10㎡当たり発生量は4.7頭（平年3.0頭）と平年比やや多であった（+）。

イ 八代地域の4月第1～4半旬の1か所当たりの予察灯誘殺数は2.0頭（平年3.5頭）と平年比やや少であった（-）。

(3) 対策

ア 越冬世代の発蛾最盛日から予測される第1世代の発蛾最盛日は6月1日（4月23日時点）。最新の情報を病虫害防除所のホームページ

（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）で確認し、適期を逃がさないように発蛾最盛日及びその1～2週間の範囲で2回程度の防除を広域で行う。

表 有効積算温度による第1世代発蛾最盛期の予測日

地域	越冬世代 発蛾最盛期 (実測)	産卵前期間	基準日 (積算開始日)	第1世代 発蛾最盛期
八代	4月12日	4月13～15日	4月16日	6月1日



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

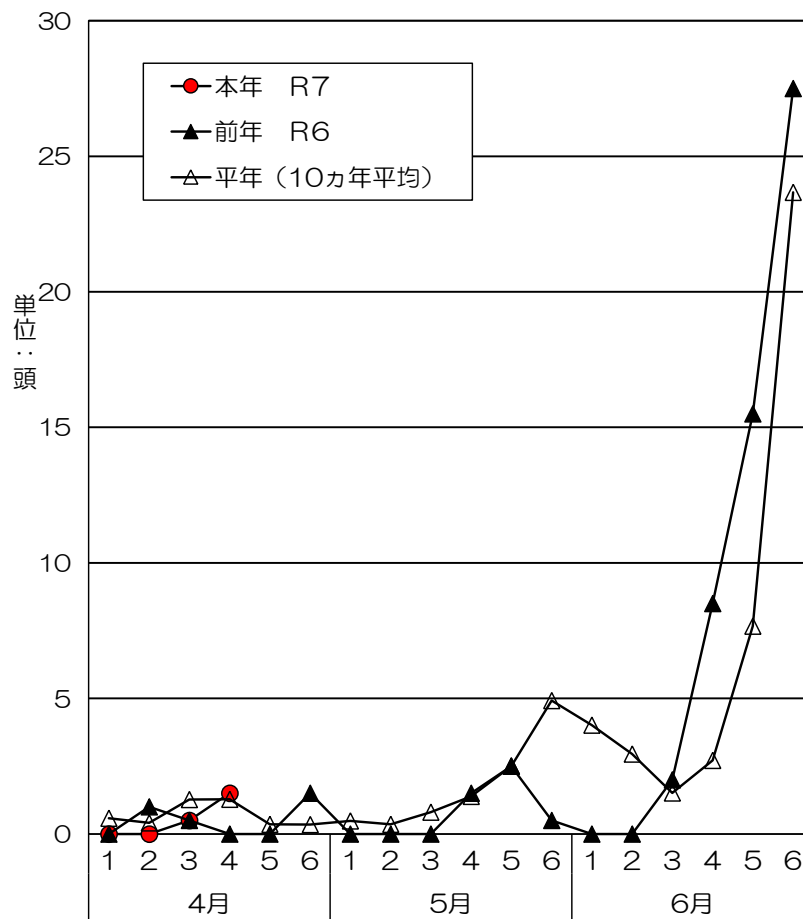


図 イゲサシムシガ予察灯誘殺数の推移(2か所平均)



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

◎茶

1) カンザワハダニ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、寄生葉率2.0%（平年5.8%）と平年比やや少の発生であった（－）。

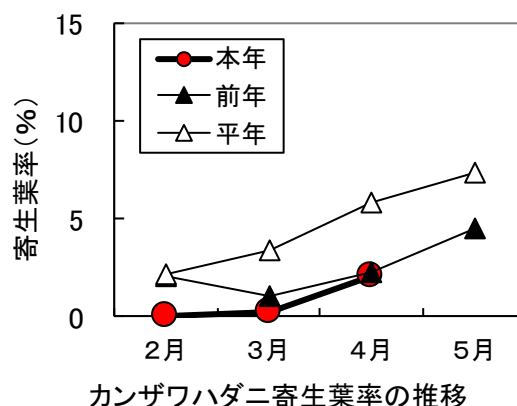
イ 茶業研究所（御船町）の県予察ほでは、4月第3半旬の寄生は認められず（平年寄生葉率3.0%）、平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 通常、一番茶摘採後から発生が多くなる。多発してから防除では効果が低下するので、摘採終了後は低密度時から防除を行う。

イ 晩霜害を受けると、摘採時期の遅延等により本虫の被害が助長されるため、早めに対策を行う。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) クワシロカイガラムシ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、寄生株率0.6%（平年9.2%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 防除適期は、ふ化最盛期（卵塊全体の60～80%になった時期）であるため、ふ化状況をよく観察して防除する。

イ アメダス地点の有効積算温度シミュレーションによる第1世代ふ化最盛日の予測では前年より10～15日程度遅い予測であった（4月22日現在の気象データから算出）。下記の予測日を参考にしてほ場をよく観察し、防除時期を判断する。

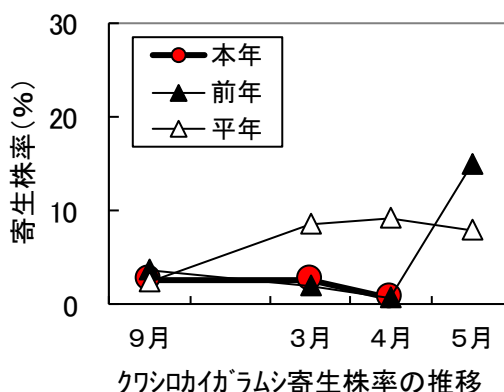


表 クワシロカイガラムシの第1世代ふ化最盛日予測（4月22日現在）

アメダス地点	鹿北	菊池	甲佐	水俣	上
第1世代 (前年比)	5月18日 (12日遅い)	5月11日 (12日遅い)	5月10日 (10日遅い)	5月7日 (15日遅い)	5月14日 (14日遅い)

※クワシロカイガラムシの第1世代ふ化最盛日予測に関する情報は病虫害防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）に掲載し、随時最新の情報に更新します。

ウ 発生が早い場合は、一番茶摘採後すみやかに徹底防除を行う。

エ 幼虫は、苗木や農機具に付着して分散する場合もあるので、苗木購入、育苗、摘採等管理作業で分散しないように十分注意する。



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

3) チャノコカクモンハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では発生が見られず（平年被害葉数0.6葉／㎡）、平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査では、4月第1～4半旬の捕獲頭数が、合志市は24頭（平年18頭）と平年比少の発生であった（－）。

御船町は1頭（平年61頭）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。通常、各茶期の摘採直後が防除適期にあたる。

イ 病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参考に防除適期を把握する。

4) チャハマキ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では発生が見られず（平年0.4葉／㎡）、平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査では、4月第1～4半旬の捕獲頭数が、合志市は25頭（平年41頭）と平年比やや少の発生であった（－）。御船町は17頭（平年32頭）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア ほ場を見回り発蛾最盛期から7～10日後の若齢幼虫を対象に防除を行う。

イ 病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参考に防除適期を把握する。

5) チャノホソガ

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では発生が見られず（平年0.3葉／㎡）、平年比やや少の発生であった（－）。

イ フェロモントラップ調査では、4月第1～4半旬の捕獲頭数が、合志市は3頭（平年26頭）と平年比少の発生であった（－）。御船町は8頭（平年11頭）と平年比やや少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 防除は、三角葉巻をつくる前の若齢期や幼芽期（新芽が5mm以内）に行う。

イ 病害虫防除所ホームページ（<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>）を参考に防除適期を把握する。



◎カンキツ

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月24日福岡管区気象台発表の九州北部地方の1ヶ月予報では、向こう1ヶ月の降水量は平年比並～少の予想である(－)。

(3) 対策

ア 落花期から落弁期に降雨が続くと発病が多くなるので、満開期及び落弁期(5月上旬～中旬)の防除を徹底する。

イ 整枝せん定を十分に行って樹幹内部の通風採光を図る。

ウ 花卉の離脱が悪いと多発する傾向にあるため、木の枝をゆする等により花卉を落とす。

2) ミカンハダニ

(1) 発生量：並

(2) 根拠

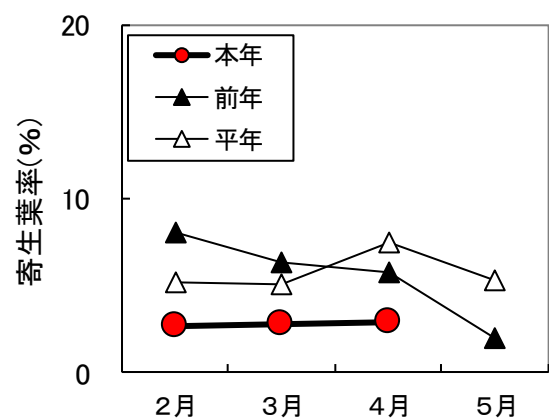
ア 4月の巡回調査では、寄生葉率2.8%(平年7.5%)、寄生頭数0.5頭/10葉(平年1.8頭/10葉)と平年比やや少の発生であった(－)。

イ 果樹研究所(宇城市)の県予察ほでは、4月第5半旬の雌成虫の寄生葉率75.0%(平年28.2%)、寄生頭数242頭/100葉(平年130頭/100葉)と平年比多の発生であった(+)

(3) 対策

ア マシン油乳剤を散布していない園では、新梢葉での発生に注意する。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



ミカンハダニの寄生葉率の推移

◎ナシ

1) 黒星病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病葉は確認されず(平年0.0%)、平年並の発生であった(±)。

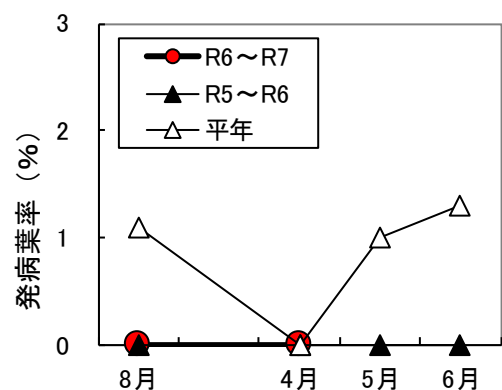
(3) 対策

ア 罹病葉及び果実は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第園外に持ち出して処分する。

イ 保護殺菌剤による予防散布を心掛ける。

ウ 降雨により、萌芽期や開花期の防除が十分でないところでは、降雨のたびに感染が拡大するため、晴れ間を見て防除を行う。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。また、QoI系、DMI系及びSDHI系の薬剤は年間使用回数をそれぞれの系統で2回までとする。



黒星病発病率の推移



◎冬春トマト

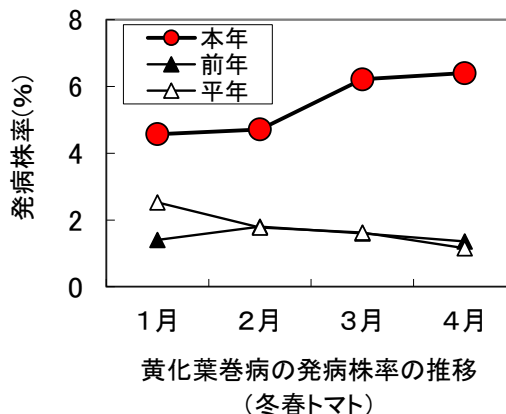
1) 黄化葉巻病

(1) 発生量：多

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病株率6.4%（平年1.2%）と、平年比多の発生であった（+）。

イ 4月の巡回調査では、コナジラミ類の寄生葉率は0.7%（平年2.2%）と、平年比やや少の発生であった（-）一方、4月24日福岡管区気象台発表の九州北部1ヶ月予報では、向こう1ヶ月の気温は平均より高い予想である（+）。



(3) 対策

ア タバココナジラミを施設内で「増やさない」対策及び保毒虫を施設外に「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。

イ 施設周辺及び内部の雑草は、コナジラミ類の生息・増殖場所となるので除去する。

ウ 黄色粘着板トラップを施設内に設置し、タバココナジラミの早期発見に努める。

エ 詳細は、令和7年2月28日付発生予察注意報第9号

(<https://www.pref.kumamoto.jp/uploaded/attachment/271912.pdf>)を参照。

◎冬春ナス

1) すすかび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病株率12.8%（平年42.3%）と平年比やや少の発生であった（-）。

(3) 対策

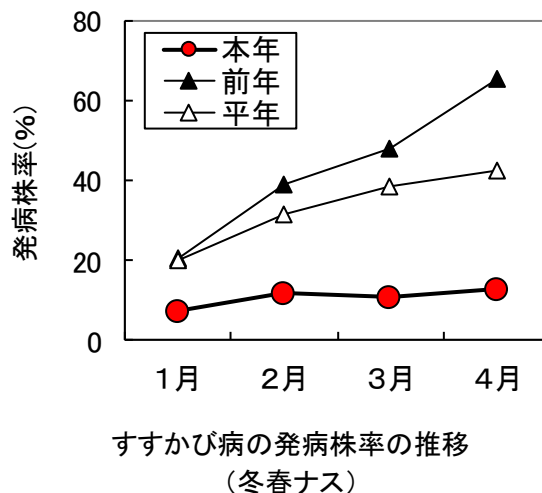
ア 発病葉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 発病を確認した場合は、直ちに薬剤による防除を行う。散布の際は、散布むらが生じないように、十分量の薬液を丁寧にかける。

ウ 発病葉や施設資材上に付着した病原菌が次作の伝染源となるため、発生が多い場合は、栽培終了後に太陽熱消毒を行い、病原菌密度を低下させる。

エ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

オ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春キュウリ

1) うどんこ病

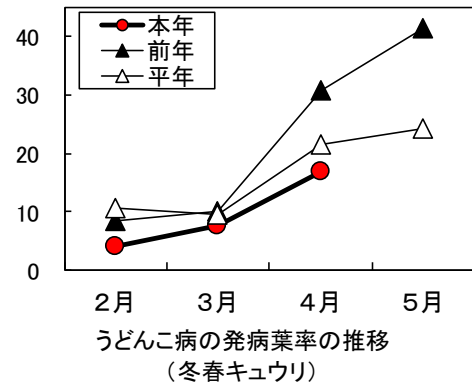
(1) 発生量：並

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病株率17.0%（平年21.4%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する（詳細は、3 防除のポイント等の「施設野菜における地上部病害対策」を参照）。



2) ベと病

(1) 発生量：並

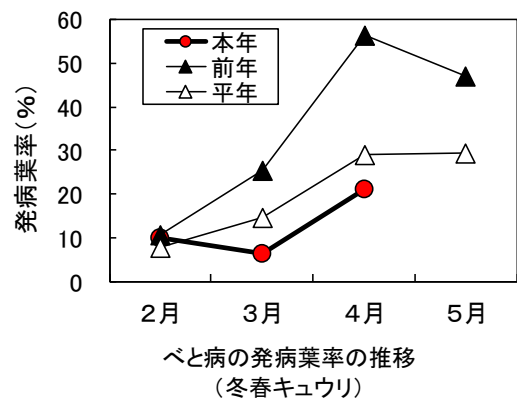
(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、発病株率21.0%（平年29.2%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 湿度が高い条件や肥料切れで多発するので、過湿を避け、肥培管理に注意する。

イ 多発生後は防除が困難なので初期防除を徹底し、薬剤が葉裏に十分かかるように散布する（詳細は、3 防除のポイント等の「施設野菜における地上部病害対策」を参照）。



◎ウリ科野菜

1) キュウリ退緑黄化病、メロン退緑黄化病、スイカ退緑えそ病

(1) 発生量：並

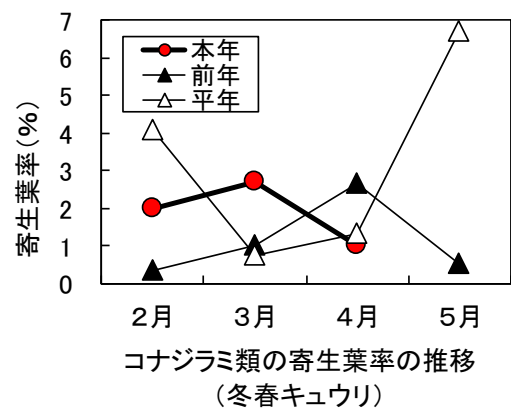
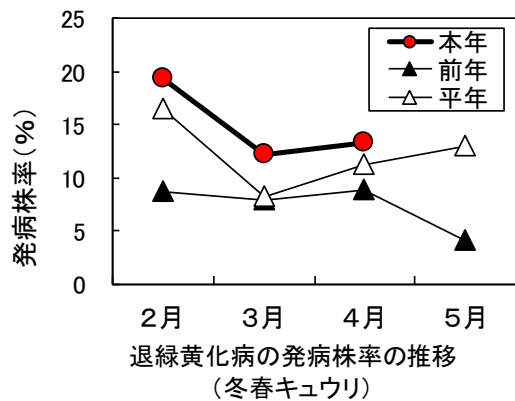
(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、キュウリにおいて、発病株率13.3%（平年11.2%）と平年並の発生であった（±）。

イ 同月の巡回調査において、キュウリのタバコナジラミの寄生葉率は1.0%（平年1.3%）と平年並の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 保毒虫を施設内で「増やさない」対策および「出さない」対策を徹底する（3 防除のポイント等の「野菜のウイルス病まん延を防止しましょう」を参照）。



◎イチゴ（親株）

1) ハダニ類

(1) 発生量：やや少

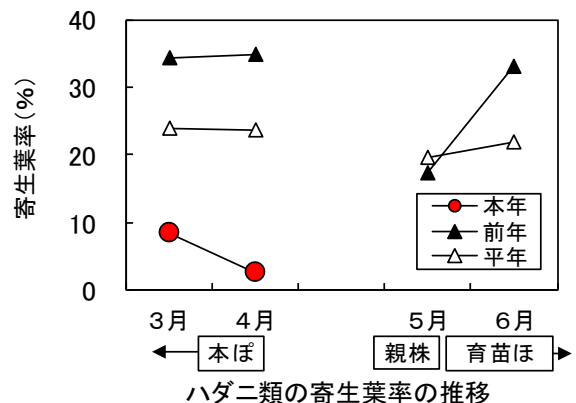
(2) 根拠

ア 4月本ぽの巡回調査では、寄生葉率2.4%（平年23.7%）と平年比少の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 次作での発生を少なくするために、育苗ほ（親株床、育苗ハウス）へ持ち込まない対策を徹底する（3 防除のポイント等の「イチゴにおけるハダニ類の防除対策」を参照）。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



◎冬春果菜類

1) 灰色かび病

(1) 発生量：やや少

(2) 根拠

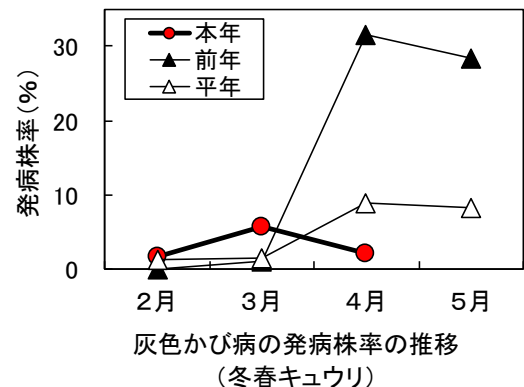
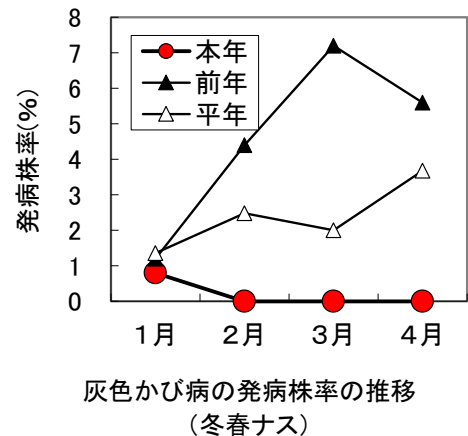
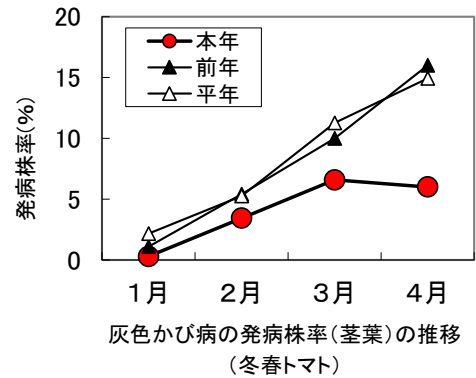
ア 4月の巡回調査では、トマト茎葉で発病株率6.0%（平年14.9%）と平年比やや少、ナスで発病株率0.0%（平年3.7%）と平年比少、キュウリで発病株率2.0%（平年8.8%）と平年比やや少、イチゴ果実で発病は確認されず（平年0.4%）、平年並の発生であった（－）。

(3) 対策

ア 発病果、発病葉、花卉は伝染源となるので、早期に除去し、処分する。

イ 過度のかん水を避けるとともに、温度管理に注意しながら換気に努める。

ウ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



2) タバココナジラミ

(1) 発生量：並

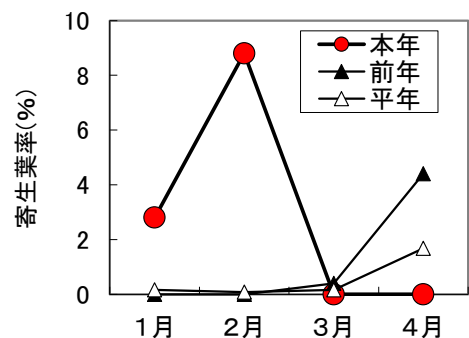
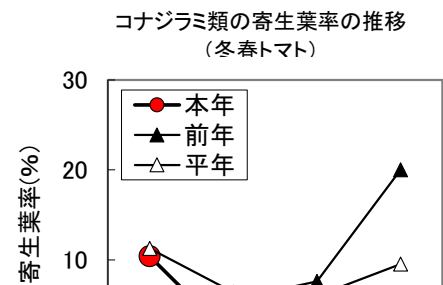
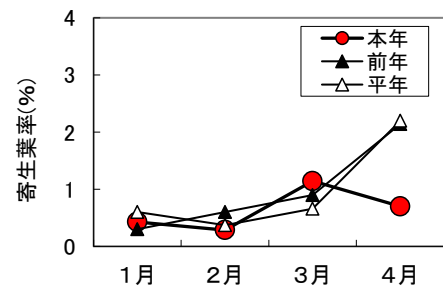
(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、トマトで寄生葉率0.7%（平年2.2%）と平年並、ナスで寄生葉率3.6%（平年9.5%）と平年比やや少、キュウリで寄生葉率1.0%（平年1.3%）と平年並の発生であった（±）。

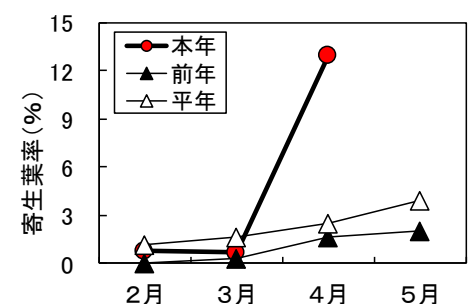
(3) 対策

ア タバココナジラミは、トマト黄化葉巻病、トマト黄化病、ウリ類退緑黄化病、スイカ退緑えそ病の病原ウイルスを媒介するので、トマト、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

イ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



アザミウマ類の寄生葉率の推移
(冬春ナス)



アザミウマ類の寄生葉率の推移
(冬春キュウリ)

3) アザミウマ類（イチゴ除く）

(1) 発生量：やや多

(2) 根拠

ア 4月の巡回調査では、ナスで寄生葉は確認されず（平年1.7%）平年並、キュウリで寄生葉率13.0%（平年2.5%）と平年比やや多の発生であった（±）。

(3) 対策

ア 粘着トラップ等を設置し、早期発見に努め、早期防除を徹底する。粘着トラップの色は、ミナミキイロアザミウマに対しては青色、ミカンキイロアザミウマに対しては青色または黄色を使用する。

イ ミナミキイロアザミウマはウリ類黄化えそ病の病原ウイルスを媒介するので、ウリ類では本虫の発生に注意し、防除対策を徹底する（3 防除のポイント等の「**野菜のウイルス病まん延を防止しましょう**」を参照）。

ウ 施設周辺及び内部の雑草は、生息・増殖場所となるので除去する。

エ 薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。



イネ種子伝染性病害の育苗時対策について

イネ種子伝染性病害（いもち病、ばか苗病、もみ枯細菌病など）は保菌種粳が第一次伝染源で、苗箱で発生すると、苗いもちやもみ枯細菌病による苗腐敗を引き起こします。今後1ヶ月の気温は高い予想ですが、浸種時の水温が高くなると細菌性病害の発生が助長されるため、注意が必要です。種子消毒、浸種～育苗期間の管理を徹底して、保菌種粳から苗への感染を防ぎましょう。

〔種子消毒〕

- (1) 購入種子でも塩水選および種子消毒を行う。
- (2) 登録農薬での浸漬処理では、薬液が行き渡るように網袋等に粳を入れ過ぎないようにし、水温は10℃～15℃で行う。
- (3) 温湯消毒（57℃で10分間浸漬後直ちに冷水で冷やす）および微生物農薬による種子消毒では、温度管理を適正に行う。

〔浸種～育苗期間〕

- (1) 浸種時の水温が高くなると細菌性病害の発生が助長される。そのため、浸種時の水温が高温にならないように、浸種実施場所等に注意する。
- (2) 種子消毒後の苗にいもち病菌を感染させないため、育苗床に被害わらや粳がらを持ち込まない。
- (3) 育苗中は高温、多湿にならないように管理する。

スクミリンゴガイの防除対策について

昨年は平坦地を中心に多発ほ場が散見されました。水温が15℃を超えると活動を開始するため、移植後はほ場をよく観察して、以下の防除対策を徹底しましょう。

- (1) 水路から水田への侵入を防ぐため、取水口および排水口は金網（4mm以下）で覆う。さらに、排水口は、常に排水路の水面より高くなる場所に配置する。
- (2) 深水管理すると被害が大きくなるので、発生が多い水田では水深1cm以下の浅水管理を行う。
- (3) 移植後に水田内の貝が多いときは捕獲する。特に、浸冠水後は貝が侵入しているので、見回り捕獲する。
- (4) 薬剤防除を行う際、薬剤には貝が摂食して殺貝効果が現れる剤（メタアルデヒド等）と食害防止する剤（カルタップ等）があり、食害防止効果を持つ剤の使用後に、食毒による効果のある剤を使用すると効果が発揮できないので併用はしない。
- (5) 特殊肥料として販売されている椿油粕は、農薬として登録されていないため、スクミリンゴガイなど農作物の害虫の駆除目的で使用しない。



イチゴにおけるハダニ類の防除対策

～次作での発生リスク低減に向けて～

本作の本ぼにおいては、ハダニ類の発生は平年より少なく推移しました。しかし、高温等の気象条件によっては、次作で多発する可能性があります。多発させないためには、ハダニ類を親株に持ち込まないことが重要となるため、以下の対策を徹底しましょう。

- (1) 本ぼからの持ち込みを防ぐため、親株ほの管理作業は最初に行う。
- (2) 本ぼで除去した老化葉や収穫終了後の株をほ場周辺に放置しない。
- (3) ほ場周辺の雑草は発生源となるので、除草を徹底する。
- (4) 薬剤防除の際は、効果を高めるために事前に下葉かぎを行い、十分な液量で薬液が葉裏に十分かかるように丁寧に散布し、散布むらをなくす。
- (5) 育苗期は気門封鎖剤などの物理的資材を積極的に活用する。気門封鎖剤は、ハダニ類に直接付着しないと効果がないため、特に丁寧に散布する。また、卵への効果や残効性が低いため、7日程度の間隔で複数回散布する。



野菜のウイルス病まん延を防止しましょう

本県では「トマト黄化葉巻病」、「トマト黄化病」、「キュウリ・メロン黄化えそ病」、「キュウリ・メロン退緑黄化病」、「スイカ退緑えそ病」などのウイルス病が発生しています。これらの病原ウイルスは、コナジラミやアザミウマ等の微小害虫により媒介されます。

これらの微小害虫は、気温が高くなると活動が活発になるため、今後、ウイルスを持った虫（保毒虫）が施設外に拡散することによってウイルス病の発生が増加することが懸念されます。そこで、確実にウイルスの伝染環（つながり）を絶ち、地域におけるウイルス病の拡大を防ぐため、以下の対策を必ず行いましょう。

1 保毒虫を「増やさない」対策

施設内で微小害虫を増やさないようにし、栽培終了後に保毒虫が野外へ飛び出す危険性を減らしましょう。

- (1) 発病株は重要な伝染源となるので、適正に処分する。
- (2) ハウス内に粘着トラップを設置し、害虫の密度を低下させる。
- (3) コナジラミ類の発生がみられるほ場では、継続した防除を行う。
- (4) トマト黄化葉巻病抵抗性品種であっても、トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV）に感染し伝染源となるため、コナジラミ類の防除を継続して行う。
- (5) ウリ類の連続栽培を行う場合は、保毒虫を次作に持ち越さないように防除を行う。

2 保毒虫を施設外に「出さない」対策

地域（野外）の保毒虫密度を高めないために、ハウス内から微小害虫を逃がさないようにしましょう。

(1) 栽培中の「出さない」対策

- ア 定期的に施設周辺を見回り、ハウスビニルや防虫ネットに破れが無い点検し、必要に応じて修繕を行う。
- イ 成虫に効果の高い剤を主体とした薬剤防除を行う。

(2) 栽培終了後の「出さない」対策

- ア 微小害虫の施設外への飛び出しを防ぐため、栽培終了後は必ずハウスを密閉してから一斉に植物を枯らす。
- イ 悪天候等で作物の枯死に時間がかかると予想される場合には、古株枯死に使用できる薬剤^{注1}の併用も検討する。なお、使用にあたっては、必ずラベルなどで使用方法を確認し、遵守する。
- ウ 地域で取り決めた密閉処理期間を遵守し、微小害虫及びウイルスを完全に死滅させる。
- エ 施設内の片付けは、密閉処理が終了してから行う。

注1) 令和7年4月25日現在において使用可能な薬剤は以下のとおり

- ・カーバムナトリウム塩液剤（商品名：キルパー）
 - ・クロルピクリンくん蒸剤（商品名：クロピクフロー）
- ※クロルピクリンくん蒸剤のうち使用できるのはフロー剤のみ
クロピクフローはメロン（漬物用メロン）には適用外



本予報は、ホームページに掲載しています。

<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>

Ⅲ 【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予想	発生概況及び注意すべき事項等
		平年比	
カンキツ	そうか病	並	果樹研究所の県予察ほでは、初発日は平年より3日早い(+)。春葉で発生が見られる場合は、発病した葉は摘葉し、灰色かび病との同時防除を行う。
	かいよう病	並	防除員報告では平年並(±)。春葉の感染が多いと、果実への感染も多くなるため、春葉の防除を徹底する。
	アブラムシ類	並	巡回調査は平年並(±)。発生量や発生時期は年や場所により差が見られる。新葉の展開に伴い増加することがあるため、発生状況に注意する。
ナシ	赤星病	やや少	前年の巡回調査では平年比やや少(-)。黒星病との同時防除を行う。
	アブラムシ類	並	巡回調査は平年並(±)。発生量や発生時期は年や場所により差が見られる。新葉の展開に伴い増加することがあるため、発生状況に注意する。
ウリ科野菜	つる枯病	並	防除員報告では、メロン、スイカで平年並(±)。多発後は防除が困難なので、発生初期の防除を徹底する。
	菌核病	並	防除員報告では、メロン、スイカで平年並(±)。かん水は直接株元に行わず、株元周辺を出来るだけ乾燥状態に保つ。
野菜全般	アブラムシ類	並	巡回調査では、トマト、ナス、キュウリで寄生葉は確認されず(平年トマト0.0%、ナス0.1%、キュウリ0.4%)、平年並、イチゴで寄生葉率0.4%(平年1.1%)と平年比やや少(±)。防除員報告ではハクサイで平年比やや多、メロン、スイカで平年比やや多～並、ナスで平年比やや多～やや少、トマト、イチゴ、キュウリ、ダイコン、ハウレンソウで平年並、アスパラガスで平年並～やや少(±)。発生を確認したら、直ちに薬剤防除を行う。
【野菜病害虫の共通対策事項】 ・換気や排水を良くし、過湿の防止に努める(病害)。 ・多発後は防除が困難になるので、早期発見と初期防除に努める。 ・薬剤抵抗性の発達を防ぐため、系統の異なる薬剤のローテーション使用を行う。			



農薬安全使用上の留意点

農薬を使用する際は、必ずラベルなどで使用方法を確認し、登録がある農薬を使うとともに、収穫前使用日数や使用回数、希釈倍数等を遵守しましょう。

また、ミツバチや魚介類など周辺動植物及び環境へ影響がないよう、飛散防止を徹底するとともに、事前に周辺の住民や養蜂業者等へ薬剤散布の連絡を行うなど、危害防止に努めましょう。

◎ 詳しい内容等については 病虫害防除所(農業研究センター生産環境研究所予察指導室)
(TEL: 096-248-6490) にお問い合わせ下さい。

※なお、本文はホームページ「<https://www.pref.kumamoto.jp/soshiki/75/125504.html>」上に掲載しています。

